



中村俊定文庫
文庫 18
575



序



東夷南蠻西戎小狄曰夷八荒 乾坤の
を其るふるをその知るる人か古く市川相蓮
三神といひ時子并其角の門子あり此乃又名
ありと云ふ恒久と集といひ伎藝を此せり此を
此の云ふ妙法此多しと云ふと并此此此力農と云
ゆへにあり今しし 夜ふ流流此ハ又舎江部子
此のりりりり被拓る此白の是も稲城の藤子
ういしと云ふ事 此をたると此此種と云ふ
ちりしと云ふ事 此のりりりり此此此此此

5

予の序せよと使つたに於ては、
おりの子我場も序せよと申され、
招き出さるるや、父の招きかゝるに
不承し、お世と然し、
天の旨に依りて改えの、
神年月

東武印之島白紀

栢延傳

故人市川栢延父と云へ祖市川團十郎法名ハ
門輿言入室覺榮居士と云へ浪不推中才磨の
門の栢延にて法名少牛といふも其父ハ十苑
法名淨善母々妙壽と云へ總別情谷村の
富田農ありて堀越氏と云へ志すは十苑耕収の
業といふも任侠の氣城ありて肥壤の總別
と云へくともありしは江都小島ありて
任事すし時小島治三年庚子和泉所小任事
志多んを致すてこみく少牛と云へや孝堂名城

満ちて花といふ知より伎藝よさしく俳優を
好むるよし聞かぬ伎家ふ今市川團十良と号す
父は勇氣成りけり荒事といふと此道
と云ふも和粉といふ通身をわらふと三神の語
乃大右刀と号す且此の小さき記扇成りて
之は此藝に犯云と可代此續き犯言り
位相大あるとと云成りてと号す牛一よりの
と云ふはゆきふ戯場藝中此大祀と稱す
へ一と云ふ子九孫血をもられ天皇とちたふ
語は傳へて此家業ハいふ及り此がけり記語

と号す晋子の孫よとて三神と名乗り之孫
十年中々十歳まで初齋堂を勤め又より十七
年此秋二代目團十良と号す一は是あり尊保
二十年此冬亡父團十良此初名と号すこと云は
汝を花といふ藝進も栢造と号すたけ伎藝
ふて諸人を悦びしむることかきしむるよしある
世ふ貴きも此此の五月此大右刀三神の
語をわらふ一技陰製法も此唐流此花小
三神あると云ふ名もろく此撰婦の及(所)の
をき團十良いふも團十良せよといへる

長城あけ口城あけおとせたり夜よある傍の曰
日中スウツェントラニ市川團十郎といふ力者ありやまらるる
高船トモもたふまゝに城傳へたりとく人傳へり
長崎より此又返るるは是もたれ矢の根又郎
たれへし父は名を削りて他の國まで傳へおす
おと末男もたれ名をといふはくはく人
役舞をたいとゆめを犯歌教へたお平公長
月々お中した風流をたはくはくはくはく
舞へし名譽八宮入とく九月廿四日訖年
七十二歳おけ世と去るといふはくはく子孫

東部お續きく名譽今に伝へんありく
枝葉年しくおとり城増拓造生涯此
うちいひ伝へしはくはくはくはくはく
一と名をくはくはくはくはくはくはくはく
略写しとく名譽花籠五方とく拓造と
交深きはくはくはくはくはくはくはくはく
画へんはくはくはくはくはくはくはくはく
おと名譽おと月神の百八文倉月共書



咲苑

栢苑

右乃此獨也

乃乃



五



栢蓮紅白集

父舎自笑閣

善く部

信く語毎の画よ



了くしと出子朝日のわの水を

かまてりくくをこむちとせり代

よ木よ旭の画

烏帽子まゝ朝飯子記子りん

ききえ讀

帷帳をよあつ役持 費い母

宝永あつ子帷をよてききえの

よこに跡乃ききえをききえの

聖徳太子の姫の尻うしろ

これ竹の葉をかきとてさし
掛ひわらふこころのりけ

うけや宿さう寝のあさほむき
毎さんとしきふるのちたさくわ

孝典

少くもせまかこまりに梅の香
まも漸柳子鳩乃しとる手

今年二月十九日亡父才牛
正當二十七周忌也捻香拈花
尚以不為足故恭請貴句

佳吟而為一集供牌前矣且

以刹那之間孝養勿怠之意
為心戒耳

うはしはと目新もまて新也重經
柳る花柳土筆のそ無袴

俚句をよめる二十七回乃
結句の意を述

佛の氷の風の和訓也

花柳伊予のそまらぬの海さ
出まひやとて表位を初朝

いふ書をおかけとてまゝなり
この初陽毎朝来と

あきまゝなり初陽毎朝来と
いふ書をおかけとてまゝなり
又事をも熊谷をよやほ忘る
初午やおとちのくと赤ら飯
まの午や極き又山を赤の飯
初午や何ふら地履も富士
下子孫仁王も若や温帯係
穀入や証の結りもよのまき

題汎曲 抄歌

穀入やいつこ式部と云ふは
湯水や佛ともくハまきこ好
志は〜や燕る果能たも〜
蜂乃菜や寒山志いとエまとの
乃〜んのかよ乃ほ〜や猫の燕
急ま〜麦波存極の小窓外

社徳をさして

みちをけ乃道をぬ〜か〜向の
粉米さ〜〜枯華〜微笑そ

春を花翁のうきまを数角と
半中よりて

塩竈のともなはるるをなまら翁

白ひ梅一花 曙 春の春

白酒乃乳ふこほ一花 曉ささる

不動さま細

詠めよやうこのぬ山乃大はら翁

碓子ぬ運てむまこまぬうハを梅

やこみ入るようよそ不二の山

拍うつと拍うつと板拍うつと

とつとつと百ち海吹舟

上巳

おめーをき流はるのすし小楸

鈴をさこのまを流るる節白小

之日月子をを出守猿や枕の花

猿河げと下ハ酸味岩の泥の海

少長画乃舟子

春を筆に遠く笑へる舟の秋

夏之部

岸赤く画を畫す乃裕也
陸より上流若若申の裕之礼
初の字は古字也

年月二の如く

三年も淀の浦をえや水

鳳凰臺上見仙女

蜀魂啼きや伊勢より盛

里人や下流の長橋保くあり

高橋山乃世様子あり

一ちりも半のりやまは部公
こゝもありやなす

あまのやと流乃春中一時鳥
子欲誰うかこく
津坂へ廻るをかくつむ草蒲曳
人形のゆかりきてことか
手乃甲乙柏子花ぬさすり解

病中法活午

看病と家々皆中風 柏と
艾草見と和つハ程のさく鼓
管火や石山のるりニ井法活

今冬もさういふ事候成部と云
ふも此の如く有りたり也と云
山之よなき事も此の如く候
花菱生男も有りて候也
十四日とハ候り

梅干や是も新造の依座の候
昔水子さ山々之傍う候す

山王宮

昔水子鼻如ぬく持棧田彦
彦松乃陰下

雨雲涼しな松乃鱗、那
漁人者、鰻魚也、神の浦
山伏乃烟を通り星々

水母

思ふ事、これこそ水母の事

種之部

家よき年暮つたは事して大の川
乞やつてはふれ上り申念との川
板橋園に編坐ありては初巻
阿婆塔の帆柱に申候方の海
白梓乃世を乃のぬきり女を志
古例を以てや目録のよき人

宝暦六年八月七日癸卯日
二日十日ちきこも晴こるれを
谷太王測るるこも福ちる所

よあせのひさし

二日十かまの若き経や釣小舟
以朝やおもへハ稲乃花は春
以穀や稲乃中ゆく赤の飯
釋く新様の歯入と 礼 種
一奇とんしてやも待てり小市箱
詩書ハ二七リり乃る人外
新月の古乃字めくく大観
名月や合致もこもれ揚平

名もたれぬ 月に此に 洞壺
久月也 此にや 洞壺に 上り山
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
月今 幸に 此にや 洞壺に
其れも 此にや 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月

洞壺に

若麦切乃名きくされ十の
風のよみ中ふゆをうふる
山海集々乳子のつく 蒲萄の
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月
洞壺に 上り月 此にや 洞壺に
幸傳り 人も 洞壺に 上り月

後海のき船も地獄もさしあがり
以の雲や拂ふ強さとさきの角
いゝ船よとていふやとて南瓜
鬚鈴の尾上の清と撞ぬく
さあ好むを文とて福も早十産
急をうゝ名有らぬ一夕時
仲由り夕涼一や破れもい
まぢれ侍はらむとてゆき錦

津燕

けつとて免責を告る一草の折
小法師の壁よあまねや起る
名を呼んで浦にうねりて岳種か
腰挿し開ち道きあま山子か
云くこゝや菊葉一とまはり
あまきりて病の清くともまはり
吟とて福ぬけを救せしあまの
見守りたまふとてまを嫁の合意
能くハ多く吟ふか生美市

肩かしの片敷あり此立非松
峯久く森より出敷十三夜
枝豆乃枝を形き如月見か
十之夜く純帳も換りぬ

陸務観の雨を望て換り

修の詩は

遠檐点滴如琴筑山空く

言をとりて十之夜より此を

琴筑のりくもつ舌つみ
雨よりくくそ良夜ぬん

出娘のきき来り此久也松乃雨
菊より曉起や星乃花
筆二下提て世去の接のう

緒細のぬきこ子辭中筆此陰

ちりんん子あめ花あうめ松れ
禪のりもまりし志あつて菊を
若く此もや門くく見ゆ松袖を盛
掃あくく雲を攙くき川空く山ち
甲斐の松の枝珊瑚樹や柿出葉

権子あまのもやおほくもの神子の神
九子の母やハ幅の右の山凱陣
二位之位標の右の玉の様
中の事の心の流の事のものあの如の如の如の如
未枯ハ志の雪のののあのるの先の早の起
おの葉のあのるの也のはの年のあのるの沙の神の言
昔の神のやのかのるのらのりの下のりのての昔の末の神の後
初の草のやの小の母のあのるの枝の糸

初の草の北の尾のさの地の秋のもの程のさのく
けの心のくのちのやのるの方のもの草のかのらのる

昔の末の神の後

神の言の人のはの然のるの心の乃の鯛
秋の津の生の度のもの程のさのくの目の費の也
おの利の乃の利の子のもの一の也の松ののの園
石の碑のをの崗のいのりのさの如の如の如の如
宗の一のはのとの古の母のかのみの心の極の前の子

一閑々 曳りし如く 眼を
知事はあゝ 顔に感へ 顔に感へ
搦餅もいれり 感へと 感へと

九月五日

年へ口菊や 難志 志山云

冬之部

初冬や 膝を 崩さぬ 雪の松
餅喰乃 大信と 雪より 雪より
かちんー やと 吹ハヤ 雪より 雪より
焼物も 正しく 琴も 弾く 陰子海
指乃 藤朝の 雪より 雪より
雪より 教を 不二可 裾野也 志山云
一 目名古 心へ 帰る 雪より
角乃 雪より 雪より 雪より 雪より

足高ハ富士乃す我のつあふ山
りけきたもこころはあさぐほひその
しらせかきゆんそが乃十のふ
只つ川火燧乃うへに密林は
ひのまや目こるよほしーられは
本給るく二人ぬわのけむい
岩垂をも懐きしもしこ朝のわお

藤塚の終り

岩角子おや花咲水きるふら
本枯や葉人の樹乃端おるも

風や津あま仁まを膝小僧
投はま格や枯舟は縁り押へ
も信のまもあふすかまは
惚くまふまもわんぬや枇杷の香
山葉ふや袖味唱と尾末描脊中
初り新語を踏あくそまきふ
ゆはあつまに静ま乃まま
ふまらつまらわんぬら
口て吹郭巨生婦乃袖味唱
奇葉の地やまもまの地ま王寺

さう菊や例を基おのわし

初雪

初雪や君はよつと半そと此火
と山まやころんとくふ形を
初雪や先射賣りをさ乃上
音源や此のまゝをかくさる也
雪のや餅米はふさる
初雪や朝日のかくんとく

あまのたのむのたむし

あまのたむしをさるもかき
あまの市川をさるはむし

小寺に花を男よきむさ
清くふさしや清きあふ孺
山伏のたむしをくむさ
鼓をさる二本棹のまゝ
はまをさるをさるもかき
あまのたむしをさるはむし

浦風や千尋中子る能年
み更乃むはし能のや夕千尋
死寺や目跡もれさぬ徳酒屋
野を秘さの甘くはるるふれと
とくぬも 鐘もくさる山阿
とくぬもやまのいもふてくすり
けうくーおきとむ山阿 野録
者屋乃きくくくくくくくくく
情となまふけいかなおき

舟子者く河田の浦子志くそ位
紙子者く川にりりりりりりり
くくくかぬくもぬ事傍にまか
能甲の掃まくくく河田の志
瀬川おきくくくくくくく
白きくくくくくくくくくくく
女中乃きくくくくくくくく
毛纏乃くくくくくくくく
香の跡櫓子月れさくく

わきれめや君より巾持志る路引
松崎へさく家事して一きり
ちうつ冠志る鷹はる路みこもり
被褥や於政まの山やんよれ
響の釣のちんねをせ出刻子
大勝のさうやせやふ人
きんしんいねーそのおれ
勝園をつかす中村のん玉子
いねちと入るもんのい

羽衣の歌二十年始りの歌ん世

歌見せや流乃中子父の歌
白く母のらさをねてそろちら
二十子機あたる仕切場
うほをいさやみんと糺町
糺町乃友はらうい
傍流ハ吟子はありぬを鳥
端唄う歌たり向ふ肘ま
白く世描のまぬい

鬼より鬼にハ内へ福は帝

皇乃移居也ハる事類也

秋田伊之公トハハハハハハ

花々々々ハハハハハハハハ

トハハハハハハハハハハハハ

白見世の夜夜を朝をよめハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ

古坂ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ

難波津ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ

トハハハハハハハハハハハハハハ

江中着て教へ世ハハハハハハハハ

新月ハハハハハハハハハハハハハハ

顔乃歩走ハハハハハハハハハハハハ

門迄ハハハハハハハハハハハハハハ

トハハハハハハハハハハハハハハ

水仙の小はらへし上総の母
み仙やまはらへし古れ更ら時
水仙や行徳の母乃すそ山へん
山へはらへし七里のくらけ
ち被やうはいてうはらへ

さきもをまひらけを風へし
こはらへしとてはらへし小町
寄念佛の母へし
田一蓮 ちまの板へ

さきもをまひらけを風へし
焼掃やむふてはらへしあまむ石
年北の母へし朝見の富士の山
冠者もはらへし梅乃はらへし
今日もはらへしはらへしはらへし
餅搗や集せらへしはらへし
物もはらへしはらへしはらへし

雜々部

いろはにはいつてしかくもあつた
まいつちりぬるをうかたげん

寄聲書

天をまはらいつて
あつち下地なるをいふ

寄飯糰書

釜の下焚つてまわつてはらわん
まのま思ひをいふ

母り格りヤ一為ふしつ

筆録いふてめて口結やまはる
いふあつてつてとをいふ

あつてまかりて杖を月の輪乃
熊のちをいふ

お肉を乃かきまはる
おつち子なるをいふ

あつて市ねはを売るといふ
一袋のとつてをいふ

ぶりの雨に口舌はたふり
 神鳴りなるそなたころ
 中へ蛇の目志ありて京のさへ傘の
 家世は中乃むのたふり
 わたしやあまのまよあぶら
 かしらまよか白てまよ
 かまをさしやてんふる
 あまのふりてまよ
 楠二十子堀公切落
 小橋あいに山さや

人あも和泉所へ漏るまよ
 むすまよつまよ親にまよ
 熊の後ハ侍と御毒にまよ
 嵐めまよまよまよ
 まよまよ二八まよまよ
 泣くまよまよまよ
 まよめいまよまよまよ
 あまあままよまよ
 十右衛門まよまよ
 まよまよまよまよ

さんげめ八十た東つも滅すんけ
酒やめさぢり
かいらい... 尾を... 年... 影...

追か

大湯幸房我らふ相... の時
舞... 中村兼... 布...
あひ... 見... ました

あま水をなまやくめくを布月
時... を... ねつ... 水

跡虎梅竹の陰翳

梅の花虎跡... 竹の垣

水園... あり... の... け...
よ... 汐... の... や... 弦...

海のちり交國の汐干や田標の敵

たましく移乃候りきゆて

ナニ送るうきき 生移新元

初う候ふうししもたてて後う那

りー 栢道

さかしてきて涙の響 小

園の表を一針ぬきさるる

若妻の娘いさるのこらー人

新若妻のそともの娘さそそんよ

おのゝうけりけてぬんそそ切

ちちおお葉かんまはし

通くまはさういふのぬ葉あ

言乃あつて白風ふちの

あつてまのうきき

いそはしきこ音りんよ小六あまて

あつてまのうきき 山標の

花とら花口すつてんははまはら

さほのぼをつてあ麻臺よて

あつて乃くよらまはしき

ちうせ浪炮例の人よあ

ぬく汁を鉄炮洲よりふまひに
くまらに〜いよやう橋を

甲一日あう〜

あう〜油路さきかふあは
かつ〜多いの尻乃月

この田の神あ坂といふあを
〜のを鼓乃根舟の〜あを
〜あ〜あ〜あ〜

神出坂を鼓の糸つけあはどん

虫代目市川三升虫

〜あ〜あ〜あ〜

〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜

虫集あ〜あ〜

天明紀元辛丑黃鐘上浣

平安書鋪

八文字屋八左馬門梓



